

調律師がご案内するピアノと音楽のとおきの世界

# 音の扉

Vol.

2

巻頭寄稿

心とつながる魔法の箱  
ピアニスト 原田 英代

巻頭特集

ピアノ調律職種技能検定スタート  
取り組みとその目的 これからの課題

日本ピアノ調律師協会相談役

関東支部 江森 浩





## 「音の扉」2号 目次

巻頭寄稿

### 4 心とつながる魔法の箱

ピアニスト 原田 英代

巻頭特集

### 8 ピアノ調律職種技能検定スタート 取り組みとその目的 これからの課題

日本ピアノ調律師協会相談役／関東支部 江森 浩

浜松国際ピアノコンクール レポート

### 12 調律師座談会

第10回浜松国際ピアノコンクールのピアノ調律を担当して

### 21 浜コンホストファミリー

日本ピアノ調律師協会／静岡支部 大石 とし子

### 24 歴史的ピアノ探訪<sub>その1</sub>

大阪大学会館講堂の1920年製ベーゼンドルファー

日本ピアノ調律師協会／中部支部 伊東 基貴

調律師の現場より

- |  |        |
|--|--------|
| 26 音   | 進藤 尚美  |
| 28 コンサートの調律                                    | 大久保 武  |
| 31 自然と音と魂                                      | 十二所 秀正 |
| 33 国際ピアノ製造技師調律師協会（IAPBT）世界大会が、<br>日本国内で開催されました | 伊東 基貴  |

ピアノのはなし <sub>その1</sub>

### 37 発音のメカニズム

### 38 日本ピアノ調律師協会（略称 JPTA）名簿 （正会員及び特別会員）

## 表紙の絵について

日本人の音楽文化の伝承と発展には、次の世代へ深く広く高い意識を持って進める必要があります。積み重ねて来たものを次の世代へと確実に伝達していくことこそ、今大切な事と感じます

十二所 秀正（日本ピアノ調律師協会／関東支部）

心とつながる魔法の箱

ピアニスト

# 原田英代

驚くべきピアノのアクション

数年前、ボンのベートーヴェン音楽祭出演の前日、当地の楽器店で練習していたときのことでした。付き添っていた夫が、「ピアノとはなんと凄い楽器だろう！」といきなり声を上げました。店内に置かれていたピアノのアクションでハンマーの動きを試していた彼が、改めてこの楽器の威力を感じて叫んでいたのです。

鍵盤を押し下げることによって、弦に向かって放り出されるハンマーの動きの、何と滑らかなことか！喜んで空中に舞う優雅な動きの美しいこと！しかもそのハンマーの動きによって、風のそよぎのような繊細な音から轟くような音まで出せるピアノの構造とはなんと驚異的なことか！私も思わず夢中になってハンマーの動きに見入ってしまいました。



Hideyo Harada Profile

東京藝術大学、同大学院を経て、渡欧。モスクワ音楽院の名教師ヴィクトール・メルジャーノフ教授の下で研鑽を積む。1984年ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位、91年シューベルト国際ピアノコンクール第1位、93年第1回ラフマニノフ国際ピアノコンクールでは旧西側参加者の中で唯一入賞を果たす。これまでにWDRケルン放送響、スイス・ロマンド管、南西ドイツ・フィル、NHK響、読売日響等のオーケストラと共演。ラインガウ、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン等の主要音楽祭に定期的に出演するほか、明治天皇百年祭での奉納演奏も行った。オーディエンスより4枚のCDをリリースし、著書『ロシア・ピアノイズムの贈り物』（みすず書房）も好評を得る。ベルリン在住。

ピアノは弦楽器や管楽器と違って、直接音の出るところに触れたり息を吹きかけたりすることのできない楽器です。人哲学を確立した哲学者ルドルフ・シュタインナーの言葉を借りるならば、人間が物質界で作った楽器であるピアノは俗物楽器であり、音がまったく抽象的に並べられています。しかし、この楽器は、その見事な構造から、霊的楽器と同じような摩訶不思議な音を生み出すことが可能です。

### 摩訶不思議な音はどこから？

私の恩師であったモスクワ音楽院の故ヴィクトール・メルジャーノフ教授は、19世紀のロシアのピアノズムを継承する最後の人でした。彼は、「優れたピアノリストとは、あの黒い箱から摩訶不思議な音を引き出すことができる人のことを言う」とよく語っていました。帝政ロシア時代に花開いたロシアの音楽芸術では、音の響きそのものが音楽の内容を表現することのできる千差万別の色彩を誇っていました。ラフマニノフ、スクリャーピン、ホロヴィッツ、ソフロニツキーを聴けばよくわかります。もちろん、西側諸国にもそういったピアノリストたちはいました。実際の録音が証明しているのは、リストの弟子でショパンの孫弟子にあたる

ローゼンタールや、コルトー、ギーゼキングといった人々です。

では、彼らはどうしてそんな音が出せたのでしょうか。メルジャーノフ教授は、「まず大切なのは、どう弾けば良いかではなく、何を表現したいかである」と言っていました。Howを定めるには、Whatがはつきりしていなければならぬ、ということなのです。そのためには、なるべく沢山の体験をすることが大切でしょうが、そうは言っても、体験には限度があります。ですから、メルジャーノフ教授は沢山の文学を読むことを生徒に要求していました。彼がモスクワ音楽院の学生だったとき、友人のリヒテルとヴェデルニコフの3人でいつも競って文学全集を読み漁っていたそうです。そして会うたびに「今、何巻を読んでいるか？」と聞き合っていたそうです。当時ロシアにはギリシャ時代から20世紀の作品までを網羅した文学全集があり、それが彼らの読書の対象でした。結局全巻を読破したのはヴェデルニコフだったとか。しかし、リヒテルにしろ、メルジャーノフにしろ、彼らの文学の知識は半端ではなく、あらすじを知っているだけではなく、彼らは細かい心情の変化まで精通していました。そうした文学上での表現が、音楽の表現にそのまま生かされていったものと思われまふ。ラフマニノフも然りでした。彼は少年時代、師であったズヴェリエフの自宅に

友人二人と同居していましたが、三人とも、毎日小説や戯曲を読むことを義務付けられていました。そしてズヴェリエフにその日読んだ箇所を報告するのが日課で、その説明が充分でなかった場合は、小説の理解度が乏しいとして、読み直すことを強いられたといえます。このような教育は、もう今では見当たらないでしょう…。

音楽は音によって描かれた小説であり、ドキュメンタリーです。シヨパンが音楽に文学の助けは要らない、と言ったのは、彼が文学の後ろ盾なく、音で小説や詩を描くことができたからでした。この点を誤解すると、シヨパンの深い魂を描いた珠玉の作品が単なる抽象的なものになってしまう危険性があります。もちろん、音楽は文学のように対象物を限定して描くことはできません。しかし、言葉に表し難い感情の表出に関しては、音楽以上の芸術はないでしょう。無条件に私たちの心の奥まで沁み込む音楽は、何にもまして魂をつかみとり、あるときは驚づかみにまでしてしまいます。

## 音楽は触覚の芸術

「音楽は触覚の芸術である」と言ったのは、高村光太郎でした。彼は音楽を肌で聴くと言っています。これを私たち演奏家の立場に置き換えて考えますと、演

奏する指先の感触、感覚と音楽の内容が密接な関係にあることに気づきます。さらに、自分の奏でた音を触覚で聴くという感覚に意識すると、演奏するときの運動的な行為が、単に指や手を動かすと考えるのではなく、動きを音楽と共に感じるという感覚に変貌していきます。メルジャーノフは繊細な音を要求するとき、「鍵盤に接吻するように弾きなさい」とか「赤ちゃんの頬を撫でるように弾きなさい」とか言ったものでした。ある pp のアルペジオの箇所で、教授が「ふつと吹いてきた風でロウソクの炎が消えるように」と要求したとき、必然的に鍵盤に触れる指先の感覚がそれまで味わったことのないものに変わったときは驚いたものでした。それは頭脳の物理的な働きでは到底かなわないことです。

このように愛情をもって鍵盤に触れるとき、ピアノは演奏者の心の内を代弁してくれる大切な友となります。東京藝大時代、一年生の必修科目に野口体操を創始した野口三千三という先生による『こんにやく体操』の授業がありました。身体の緩ませ方をあれだけ楽しそうに教える人も珍しい野口先生が、言っていました。「体操の選手は用具にほんとうの愛情がもててこそ、ほんとうの技術がそこから生まれてくるのだ」と。それは楽器との関係に見事に当てはまることでした。私たちは、いつもステージで知らない楽器に出会

い、演奏します。リハーサルはできても、わずかな時間です。ましてや、コンクールとなると10分のピアノ選びの時間が貰えるだけだったりします（コンクールにもよるでしょうが）。時には、思うような音が出ない楽器にも出会います。そのとき、どうするか：まずは楽器に「よろしくね」と挨拶します。音を出してくれる楽器への敬意を払うのが最初です。インタープレーションがどうであろうが、聴衆の人の耳にまづ届くのは音の響きですから、この大役を担ってくれる楽器に、まず愛情をもって接すること。これは一番大切な想いです。そうしてピアノに向かうと、自然と粗い弾き方からも足を洗うことができます。もちろん、ときには音楽の必然性から険しい音、ごつい音、あるいは悪魔的な音を出さなければならない場面に出くわします。そのときは、また違った鍵盤との関わりが必要となります。中でも悪魔的な音ほど、表出の難しいものはありません。ピアノという楽器が立派になり過ぎて、きれいな音を出してくれるようになっていきます。そのときは、デモニッシュな音とはどういう性格をもつものか、しっかりファンタジーを膨らませなければなかなか戦慄が走るような音は生みだせません。映画を観るのもいいでしょう。視覚から入る情報は限りなくファンタジーを広げてくれます。そのほかにも、ファンタジーを広げる良い方法があります。往

年の巨匠シュナーベルのご子息、カール・ウルリツヒ・シュナーベルさんが講習会でおっしゃっていました。「バスや電車を待っていて時間をもてあましているときなど、辞書の助けなしでどれだけ形容詞が思い浮かぶかやってみよう。それだけでもファンタジーが広がりますよ」

心の中に渦巻くファンタジーを音楽に還元していくプロセスは、ワクワクする過程です。この夢を叶えてくれるピアノと一体となって、日々、音楽と向き合っていきたいと思っています。

# ピアノ調律職種技能検定スタート 取り組みとその目的 これからの課題

(日本ピアノ調律師協会相談役／関東支部) 江森 浩

## 日本の音楽教育の始まり

1879年、文部省からアメリカに音楽教育のため留学（1875～78）した信州高遠藩出身の伊澤修二と、アメリカの音楽教育者ルーサー・ホワイティング・メーソンによって、音楽取調掛（音楽取調所ともいう）が東京大学の敷地に設立され、1889年に東京音楽学校（現在の東京芸術大学）となった。開設時、アメリカからスクエアピアノ10台、バイエル教則本20冊（10冊現存）を購入した（「ピアノはバイエル」は、ここから始まったらしい）。

私は、メーソン氏が持ってきたクナーベ製のアップライトピアノ（芸大所有）を修復したことがあるが、メーソン氏は調律ができたらしく、日本人にも教えたと思われる痕跡が内部に残っている。このピアノはC21c5の85鍵で、1鍵目のC音のチューニングピン上に朱色でC1（1は漢字）と音名が



書かれ、次からはC#, D, D#, E…、オクターブ上にはC二と書かれており、鍵盤とチューニングピンを間違えないように、日本人に調律を教えたと思われる。

東京音楽学校時代には、卒業後、地元の音楽教師となる者も多く、調律師も少なかったためか調律の勉強があり、チューニングハンマーの操作、内部構造の授業が行われていたと聞いている。ウイーン音楽大学では、今でも調律、構造の授業があるらしい。

ピアノ以外の楽器を演奏する人は、演奏会の前は別であるが、多少のメカニック、音の調整等は自ら行っていると聞いている。ピアノ演奏者も、良い音楽を創るためのピアノのメカニック、調律等の知識は必要に思う。某音楽大学ピアノ科教授の家に調律を依頼され伺ったとき「弦が切れたときは張れるし、音程は解るが、チューニングピンの操作が悪いのか、悔しいが調律の保持ができない。調律をしても前の音に戻ると狂っているため、どうどう巡りで調律が進まない」と言っていた。調律を保持するには、構造の知識と少しのチューニングハンマー操作の訓練が必要になる。

以前、ロードレース世界選手権チャンピオン、片山敬済氏と対談したことがあり、その時「4輪車(F1)は、コンピューターを搭載すればレースに勝てるかもしれないが、2輪車(バイク)は、良いメカニックが調整してくれると、馬力が1割くらい少

なくてもレースに勝てる。良い調律師とピアニストの関係も似ていると思う」と話してくれた。私も「良い音になれば、良い音になれば」と鍵盤をたたき、タッチと音質、音量の揃いをピアニスト好みに合わせるよう努力をしている。

## 国家検定への取り組み

それは、平成12年度総会において、多米会長の就任挨拶から始まった。「当協会は申すまでもなく、国から公益社団法人として認められている、日本においての唯一のピアノ調律師団体であります。その公益性と、構成員である協会の社会的地位の向上を図るべき事とし、調律師を【公的技能審査制度】にしたい。皆さん賛成してくれますか？」との問いかけに対し、出席正会員より賛成の大きな拍手が巻き起こった。



しかし、平成16年度総会に於いて「会長としての総括を申し述べさせていただきます。就任当初、協会の革新的発展、充実のために、協会が国からの認定制度の道を歩み、協会員のさらなる公的資格を有することを願った方向での選択と、仕事の取り進めをしてまいりました。皆様既にご承知のように、新しい国の行政改革の流れの中で、民間への国家の認定制度廃止に向けての政策転換により、残念ながらこのテーマについては断念せざるを得ないことです。」

この当時は小泉総理の時代で、郵政民営化の流れの中で「官から民へ」の風潮が強く、国のお墨付きは廃止の流れにあった。

## 平成30年調律師業界の技術の底上げを 目的として再スタート

平成17年12月24日…「閣議決定において、新設の職種は民間の指定試験機関にて行うことが原則であり、指定試験機関方式とする」と発表があった。

平成18年11月10日…技能検定制度新設の協議会 ヤマハ高輪事業所  
・技能検定制度新設についての意見交換 協力要請

平成18年12月20日…技能検定制度新設の協議会 ヤマハ掛川 カワイ本社  
・業界のコンセンサスと内容の検討

平成19年1月23日…技能検定制度に関して厚労省訪問  
職業能力開発局技能評価課

・技能検定制度の実設体制の説明

平成19年3月18日…厚労省上席技能検定制度 協会入会審査視察

平成19年5月27日…平成19年度通常総会 岐阜グランドホテル  
・技能検定制度協議会準備開始の表明と確認

平成19年6月13日…第1回厚生労働省技能検定制度協議会

平成22年12月17日…職業能力開発促進法施行令が改正され、その中で「ピアノ調律師職種」が国家技能検定制度試験の「職種」として正式に認められ政令として官報に交付される。

平成23年8月31日…第40回「技能検定制度推進協議会」国立音楽院  
・試行試験 厚労省有識者視察  
以後、「技能検定制度委員会」へ

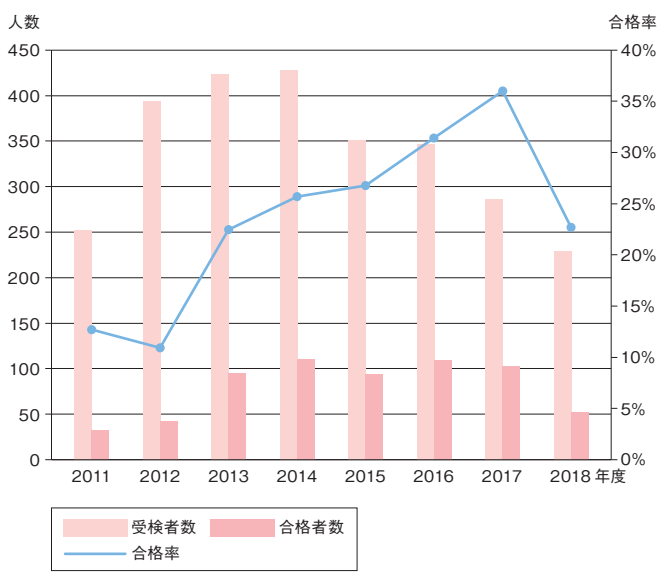
平成23年9月1日…厚生労働大臣よりピアノ調律師技能検定制度試験指定機関の指定を受ける。

平成23年10月4日…技能検定制度試験 検定制度委員伝達研修会

平成23年11月20日…ピアノ調律師技能検定制度試験を全国11会場で一斉実施

平成24年2月3日…ピアノ調律師技能検定制度試験を実施

一級受検者と合格者



## 調律業界の技術底上げに向けて

協会事務所にいると、受検者から電話があり「1級の試験の調律法の平均律（注1…語句説参照）は、ドビュッシーか、ベートーヴェンか？」の質問。「平均律は、ドビュッシーもベートーヴェンありません。12平均律は一つです」と返答した。よほど変な教育機関で勉強したのだろうと思った。初期の1級検定試験に立ち会ったとき、ひどい調律をしている熟練の受検者が多かったが、最近の受検者は勉強していると見え、余り変な調律をしているものは少なくなった。業界の底上げは成功していると思われる。

部品を販売しているメーカーでも、検定お助けグッズと称して、修理や整調に使用する工具や部品を取り扱い始めた。また、調律師養成機関でも、技能検定取得に向けた勉強に取り組んでいるらしい。

### 1級取得が最終ではなく通過点である。

40回行われた技能検定協議会では「整調は、グランドピアノで全鍵盤のタッチ（注2…語句説参照）の揃いを。また、整音も行き、全鍵盤の音質、音量の揃いも試験に取り入れたら。調律の保持力、経年変化したピアノと古いピアノの修復試験も入れたい」との意見もあった。技術の勉強は1級を取得したら終わりではない。まだまだ習得しなければならない訓練が沢山ある。

厚生労働省から「調律師として技能オリンピックに参加しませんか？」と言われている。

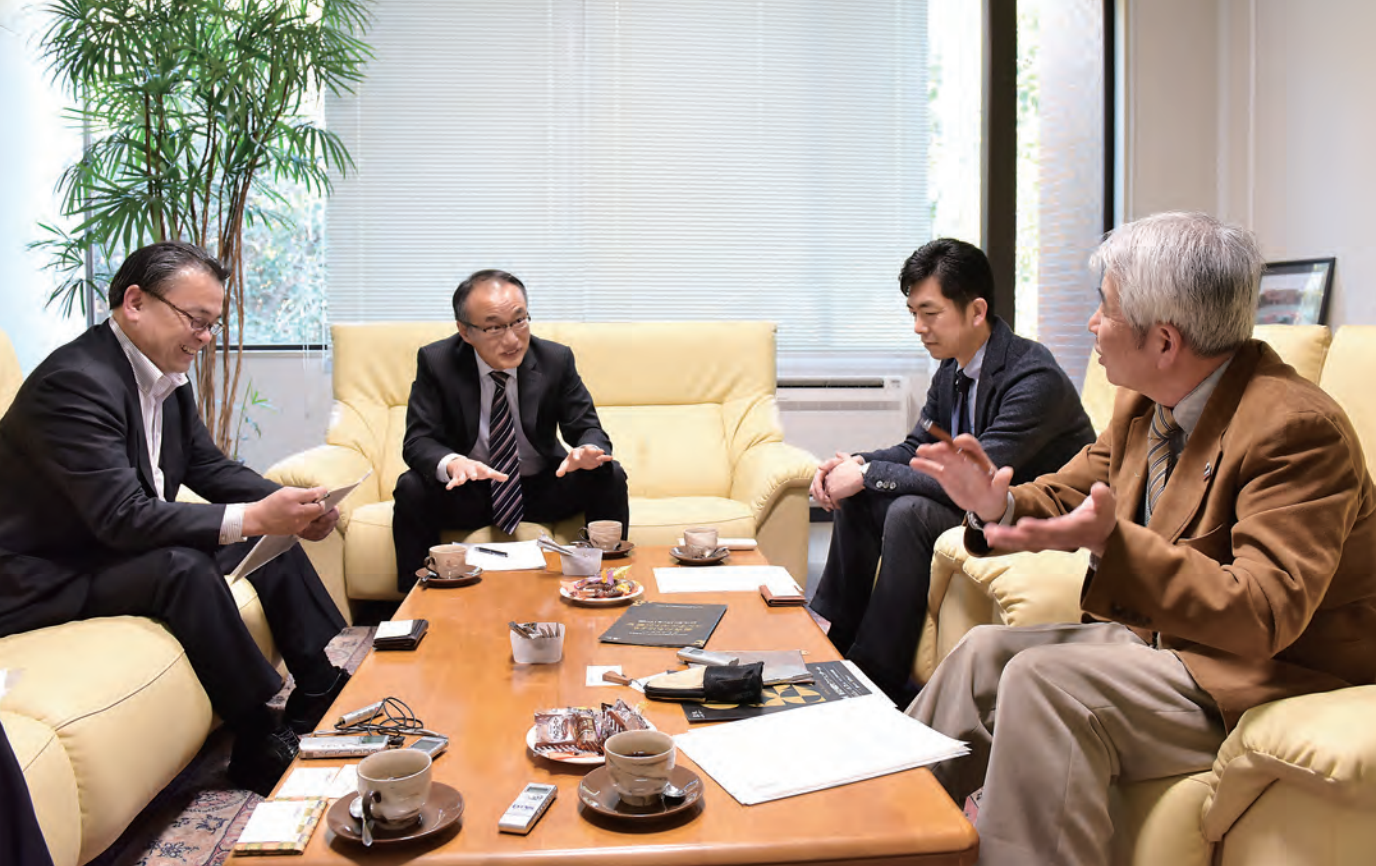
ハンマー整形、整音、タッチの揃い、歴史的なピアノの修復と作曲者の関係、調律についての倍音とインハモニシティ等：やらなければならない課題は多く残っている。

#### 語句説

（注1）平均律……12音階（D C 7 シ B）ある半音の高さ幅を同じにした音階。一方、古典調律と呼ばれている半音を均等にしていない調律法もある。ピアノは一般的に平均律を用いる。

（注2）鍵盤のタッチ…ピアノを弾いた時、個々の鍵盤アクションも含めた運動量や鍵盤感触。





# 調律師座談会

## 第10回浜松国際ピアノコンクールの ピアノ調律を担当して

2018年11月に開催された第10回浜松国際ピアノコンクールには世界中から88名の参加者が集い、アクトシティ浜松で熱演を繰り広げました。恩田陸さんの小説『蜜蜂と遠雷』の影響もあってこれまで以上の大きな注目を集めたコンクールで、約3週間のあいだ「ピアノ」を支え続けたのが各社の調律師。その中で今回は、ヤマハとカワイのピアノを日本ピアノ調律師協会の協会員が担当しました。そこで、調律を担当したヤマハの花岡昌範さん、カワイの大久保英質さんに、協会広報担当の大嶽壽宏理事が、コンクールでの調律のご苦労ややりがいなど貴重なお話を伺いました。

### ■参加者プロフィール

#### 花岡 昌範さん

- ・ヤマハ株式会社 楽器事業本部 ピアノ事業部  
コンサートピアノ推進グループ主幹
- ・一般社団法人日本ピアノ調律師協会会員

#### 大久保 英質さん

- ・株式会社河合楽器製作所  
SHIGERU KAWAI ピアノ研究所  
原器課長 兼 音造りグループ長
- ・一級ピアノ調律技能士
- ・一般社団法人日本ピアノ調律師協会会員

#### 大嶽 壽宏 理事

- ・一般社団法人日本ピアノ調律師協会  
理事（広報担当）

## 覇者たちによるコンチェルト響宴

**大嶽** 11月のコンクールの前、9月の16、17日に、これまでの浜松コンクール覇者たち6名によるガラコンサートが開かれました。まずはこのコンサートでの調律のお話からお聞かせください。

**花岡** 1日に3名のコンチェルトが聴けるとても贅沢なこのコンサートでは、ヤマハは2名の歴代優勝者に演奏をしていただきました。コンチェルトでは2,000席を超えるホールでオーケストラに埋もれない音量・響きを持つピアノを意識して準備します。今回の楽器は中ホールのハウスピアノ(常設ピアノ)を使い、中ホールと大ホールでは楽器に求められるキャラクターが違うので、大ホールに合うよう調整をしました。2人のピアニストのゲネプロを客席で聴いて、ピアニストたちにもピアノの鳴りやオーケストラとのバランスを伝え、弾き応えも確認しましたが、ピアノについてはとても信頼されていました。

**大久保** 私たちもアクトシティ中ホールにハウスピアノがあるのですが、あの時は別

のイベントが中ホールで重なっていたので、別のピアノを持ち込みました。ソロのリサイタルの時はプログラムによってガラツと調整を変えることはせず、ピアノのポテンシャルが一番良い状態になればと思って調整をしています。ピアノコンチェルトの時は若干プログラムが気になります。シヨパンのようにあまりオケとピアノがかぶらない曲に対し、ラフマニノフみたいにオーケストラとピアノがガンガンぶつかる音楽では、やはりピアノの音が聴こえてこないとちょっと寂しいので。この時\*ガジェウさんはラフマニノフの3番を弾きました。そういうことをある程度意識して調整しました。最終的な音や音楽は弾き手にもよるので、こちらの意図と必ずしも一致するかはわからないのですが、とても満足してくれました。

(\*語句説…アレクサンダー・ガジェウ  
第9回(2015年)優勝者)

**花岡** 確かにラフマニノフの3番は、ピアノソロのように始まり、曲中はオケとバトルするかのように強い音も必要なので、楽器のダイナミックレンジが広くないとちよっ

と辛いですね。ピアノは一台一台個性があるので、その個性を活かせるキャパシティの中で最大限に表現力が出せるように調整することが大切だと思います。自分のイメージでベートーヴェンだから、シヨパンだからこんな感じ、とやりすぎてしまうとまた難しさがあるような気がしますね。

**大久保** 結局、最終的に絵を描いてくれるのはピアニストですからね。良い絵を描きやすいキャンバスと絵の具を用意できるのが、調律師としては一番いいのかなと思います。



(株)河合楽器製作所 大久保英賢さん

## コンクールでの調律師の役割とは

**大嶽** では、コンクールのお話を伺って参ります。多くの方々にとって調律師というものは年々2回家庭のピアノを診てくれる人という認識がもしませんが、コンクールとなると違います。メーカーさんにとっては、これがF1のレースでピアノは走らせる車だというような準備が必要です。コンクールでの調律師の役割として、一般的な家庭回りでの調律と違う大変なこととはありますか。



(一社)日本ピアノ調律師協会 大嶽壽宏理事

**花岡** 調律師の役割とは、使用者に満足いただくことだと思います。それは一般家庭でもコンサートでも全く同じです。コンサートなら一人のピアニストに合わせてればよいのだけど、コンクールでは複数のコンテスタントが長時間演奏するという環境になります。多くの人が弾いて音やタッチが変わってしまっただけではない。選定した時の状態を維持する、あるいはそれ以上にどんどん良くなるように品質を保つ必要があります。それと共に彼らの高ぶっている神経をいくらかでもやわらげて気持ちよくステージに出られるような精神的なサポートも大切です。それがコンクールでの我々調律師の役割としてあると思います。

## 開発の確認の場でもあるコンクール

**大嶽** 浜コンについては、どのくらい前から具体的な準備をしていくのでしょうか？  
**大久保** 私の職場はコンサートピアノを作っています。常により良いコンサートグランドを作るために毎日仕事をしていきます。只、ピアノは約300年前に原型が

でき、現在ではかなり完成されている状態なので、これを進化させるのはなかなか難しいことです。亀のような歩みですが、ピアニストが頭の中に描く表現をそのまま音にできるピアノを作りたいというのが私たちの望みです。そのために今までの研究成果を試す場が浜松コンクールであったり、シヨパンコンクールであったり、数年に一度大きいコンクールが来るということですから、何年前から準備するという明確な線引きはないのですが、コンクールがポイントになることは事実です。

**花岡** やはりコンクールのためということではなく、常に進化を求めて研究開発をしていて、そのタイミングの中でコンクールがあったら、試作品も含めて一番ふさわしいピアノを選定して持って行くという流れですね。コンクールが一つの確認の場になるのかもしれませんが、また、コンクールによってもピアノに求められる個性が違います。たとえば、シヨパンコンクールとチャイコフスキーコンクールでは持って行くピアノが同じ傾向かといったら、決してそうじゃない。

**大嶽** あくまでベースとなるのは、今まで出たコンクールの内容をふりかえり、次はこうしようという積み重ねですね。

**花岡** そうですね。コンチェルトを複数回演奏するチャイコンとシヨパンの作品に限定したシヨパコン、予選と本選のホールが変わる浜コンなど、演奏曲目やホールの広さ、ステージ上の響きもピアノを選ぶ上で大きなポイントになります。そんなことがいろいろ蓄積されている中で、じゃあ浜コンはこんな感じの個性のピアノだろうとか、チャイコンはこうだろうとか、今までの経験値を活かして楽器セレクションをしますね。

**大久保** 私自身の経験もありますが、先人たちの残してくれたノウハウが蓄積されて今に繋がっているのです、それがピアノづくりに反映されていますし、コンクルールの大事な判断に繋がっていると思います。

## 35年間の努力の成果

**大嶽** コンクールが始まる前にセレクションがあり、その結果、選んでくれたコンテ

スタントから具体的に「こうしてください」という希望が出てくるかと思うのですが、例えばAさんとBさんが真逆のことを希望された場合などはどうされるのでしょうか？

**大久保** 予選が進むにつれて、次の曲目はこうなのでもう少しこうしたいという注文を受けることはありますが、真逆のことを言われるというような経験は少ないですね。

**花岡** セレクションというと、どのピアノを何人選んだかが注目されますが、どのように選ばれたかがメーカーとしては重要だと思っています。約35年前の1985年に開催されたシヨパンコンクルールの頃から日本のメーカーが国際コンクールに参加するようになりましたが、自分も担当した1995年のシヨパコンの時は公式ピアノが5台でその内スタインウェイが2台あったので、コンテスタントは使用するピアノをだいたい決めていたように思います。普段スタインウェイを弾いているので2台の内どちらかに決めよう、という具合でした。ステージの途中にヤマハがあつて

も、ちょっと鍵盤をたたいてスタインウェイの前に座るという感じでセレクションの対象にならず、それがとても歯がゆかった想い出があります。確かに普段弾き慣れないピアノを一世一代の勝負の時に選ぶうとは思いませんよね。その後、世界の音楽大学やホールに納品し、ヤマハを演奏する機会が増えてきてからはセレクションでも平等に椅子に座って真剣に選んでもらえるようになってきました。そうやって選ばれたピアノは、大久保さんがおっしゃるようにそんなに注文はないのは事実です。演



ヤマハ(株) 花岡昌範さん

奏する曲目によってはタッチが重めがいいとか軽めがいいとかの正反対の意見は稀にあります。調整で戻せる作業であればトライしますし、作業内容やスケジュールによつては、理想どおりにならないかもしれないけど頑張つて調整します、みたいな話をすることもありますね。

## ライブ中継

**大嶽** 昨年のコンクールではライブ中継されましたよね。見る人は楽しませてもらいましたが、ちょうどピアノの真上にカメラがあつて、カワイさんのピアノは製番が見えました。ヤマハさんのは製番あつたのですか？

**花岡** やはり製番がないってわかりましたか（笑）。実は製番がない訳ではなくて、製番の上にフレームと同色のマスキングテープを貼つただけですが。

**大嶽** 浜コン特別バージョンのピアノを作つたのかなと思いましたが。

**花岡** いえいえ、そんなことはないです（笑）。やはり研究開発しているピアノは製

番が見えなくてもいいかなと思つて。まさか上から映すとは思つていなかったので綺麗に貼つてよかったです。クライバーンコンクールなども上から映すようになってきましたね。

**大久保** あれはいいいなあと思いましたね。

**花岡** 確かにピアノを勉強している人が見ると指使いは勉強になりますよね。

**大久保** 特にああいうアングルは今までなかったから、普通見られない角度なんですね。見る人としてはすごく楽しかったと思ひますね。

**大嶽** やはり浜松というとOBも含めて関係する人はいっぱいいるんです。だからああいうのはとにかく注目的です（笑）。カワイさんの方はどうだったんですか？特別バージョン？

**大久保** いいえ、うちの方はあのピアノは中ホールのハウスピアノで、実はいるんなことも考えました。持ち込んで試してみたいというピアノもありましたが、どちらにも一長一短というか、そこにあるピアノはあのホールに合わせて馴染んできていたこ

ともありました。

**大嶽** ヤマハさんもカワイさんもそうでしょうが、研究開発や試作ピアノ使用という取り組みはやはり機会があることにされているんですね。

## 音づくりはコミュニケーションから

**大嶽** ピアノを弾かれる方は音楽的な表現でいると言われ、それを私たちは自分の技術に当てはめて具体的な対応を取るわけですが、それが必ずしも成功する場合だけ





じゃないと思います。その辺はいかがですか？

**大久保** 音を言葉で表現するのは大変難しく、日本人が日本語でしゃべっていても何を求めているかはよく話し合いながら感じ取らなくてはいけない。ある音の雰囲気

例えば「明るく」と言っても、その人にとってどういうことを意味しているのか。外国の人が「もっとプリリアントに」と言っても、もうちよつと音量が出てほしいということなのか、それとも音色が豊かという意味なのか。とても難しいコミュニケーションですね。

**花岡** コンサートでも同じで、抽象的な表現で言われる方は多いと思います。基本的には指摘されたことを的確に調整できればより信頼関係が深くなりますね。「この症状にはこの薬」というような回答がすぐに見出せない場合は、他方面から原因を探りながら、たくさんある引き出しから正解を導き出していくことが大切だと思います。

**大久保** あくまでも寄り添える調律師でありたいなと思います。

**花岡** やはり経験値でしょうね。いろいろな失敗もしながら、ちゃんとコミュニケーションを取って、そのピアニストの癖や嗜好もわかって調整していく。安心感と信頼関係ですね。

## 調律には永遠にゴールはない

**大嶽** コンクールの後の評価はいかがでしたか？

**大久保** ピアニストですが、聴衆も好みがありますよね。演奏に対しても、ピアノの音に対しても。最終的には、私の独りよがりではなく、メーカーとして目指していた音が作れているのか、弾き手にも聴衆にも、一音聴いて「ああ、この音、このメーカーの音だな」とわかってもらえる、そういう特徴や個性がありながらさらに広く認められる良いピアノにできたのか、というところを常に自分なりに厳しく見てはいるつもりです。それをまた次につなげて、欠点は可能な限り直していきます。でも意外にも短所と長所は表裏一体で、短所を劇的に変えようとすると長所も悪くなったりするのがピアノなので、ここが作り手として非常に難しいところです。

**花岡** 具体的に言えば、使っていたいたコンテスタントが、「最後まで気持ちよく弾けた」とか、「自分の思うような表現ができた」ということを言っていただければ、

それは成功だったと思います。お客さまもそれを聴いて、すごく表現力もあつたし、響きもあつたしと言ってくだされれば、一番いいですよ。自分の中ではできる限りのことをやった。悔いはないと思っっているです

**大久保** 僕はまだ年齢的にも経験的にもまだまだなので、悔いばかりです。調律って永遠にゴールはないなと思いますね。

**花岡** そうですね！いつまでも探求の旅は続きます。

**大久保** 20代、30代、そして今40代になって、音の好みも調律の好みも変わってきています。大先輩から言われ、その時は難しく理解できなかったことが、実は数年後にまた試してみたところ、「このことを言っていたのか」と気付かされ、常にいろんな人から影響を受けながら仕事をしています。去年のコンクールも経験と肥やしになって、また一つ上の自分の音が作ればいいなと思っっています。

## 刺激を受けながら独自の音をめざす

**大嶽** 今回ステージにヤマハ、カワイ、スタインウェイの3台のピアノが並びました。他のメーカーさんのピアノを聴いて参考に行けることもあつたかと思うのですが、どう感じられましたか？

**大久保** 他の2社さんを聴いて、「すごい！良い音だな。」と思うことはかりでした。ただ、他社さんとは違うカワイのピアノの良さもあると思うし、他のピアノの良いところは取り入れたいですが、他社と同じピ



アノを作りたい訳でもない。カワイの良いところ、他社とは違うところを含め、誰が聴いてもカワイの音だなと分かるピアノを作りたいと思っっています。他のメーカーを聴けば聴くほど、自分たちの道突き詰めていきたいという感じます。

**花岡** 調律師に左右されず、その品質を維持できるようなピアノができればいいと思いますね。当然メーカーによってピアノ開発の理想がありますが、そのキャパシティというカストライクゾーンがすごく広いピアノであれば、ピンポイントに調整しなくても大丈夫です。そうであれば、我々調律師もこのコンクールだから少しボールを高めでいこうとか、低めでいこうかみたいな自由度も高くなるだろうし。我々はあくまでもピアノにお化粧をするのみで、本質自体を変えることはできないわけですから、そのお化粧の中で色々なシチュエーションに添えてくれる本体、そんなピアノが理想です。

## 最大の山場はセレクション

**編集部** 最後に、調律について素人の読者の立場から、浜松国際ピアノコンクールにおける調律師の仕事をちよつとドキュメンタリックにお伺いしたいと思います。まず、セレクションの時コンテスタントは10分の持ち時間でピアノを選びますが、本選までのピアノをそこで選ぶのでしょうか？

**花岡** 選びますが、次の予選に進むときにピアノをチェンジすることは可能です。

**編集部** その時はまた事前に弾くことはできるんですか？

**花岡** できないんです。

**編集部** ではセレクションの時の記憶をもとに替えるんですね。セレクションでは調律師の方は客席で見ているんですか？

**花岡** セレクション中はコンテスタントの動線となる中ホール1階には入れず、2階限定で聴けます。審査員席で自分たちの楽器がどんな響きをしているかの確認もできます。さらにメーカーの楽屋が用意されていて、モニターでも見られます。

**編集部** 期間中は何時から何時くらいまで

会場にいらつしやるんですか？

**花岡** 朝6時から一番長い時で夜の12時、普通は10時ぐらいでしょうか。

**大久保** 最も疲れるのはピアノセレクションの3日間です。私たちにとって実は最大の山場はコンクールが始まる前にあって、その3日間が終わったらもうぐったりです。「まだ、これからコンクール始まるの？」みたいなところがあります(笑)。ピアノはコンクールが始まると審査員から審査をされますが、メーカーにとってセレクションはピアノストから審査をされるような場です。

**編集部** 1次予選は3人ずつブロックに分かれていましたが、調律はブロックとブロックの合間にするんですね。

**花岡** そうですね。20分の休憩と長い休憩がありますが、短い休憩では次のブロックで弾くメーカーだけが調整します。弾かれて音が狂うというよりは、湿度の影響が大きいですね。特に中ホールから大ホールに持って行くと、湿度が大きく変わるので気を使います。

**大久保** コンクールは何人もの人が続けて

演奏するので、同じ条件で弾けるように心がけています。さらに、コンクールが進んでいくにしたがって状態が悪くなるのではなく、どんどん良くなっていくように努めています。

**花岡** 1日の弾き始めの人と最後の人がたたらやはり変化はあるのだけど、そこをできるだけ変化しないように音色も調整していくというのが重要です。また、中ホールと大ホールでは響きが違います。ホール自体も楽器となるので、音がどのように飛んで戻って来るかということも含めて調律を



するので、中ホールと大ホールでは合わせ方が違うんです。

## すべてはコンテストのために

**編集部** 本選などでは個人の好みに応じて調律したりするのでしょくか？

**花岡** 弾かれる人数にもよりますが、一人の方の希望に沿っても他の方に問題のないようなことはやりますね。また、ピアノストは言わなくても、こちらが聴いていて気になることもあります。例えば、意識して濁った音を出そうとしているのか、無意識にそうなっているのかとか。その場合はきちんと確認します。

**大久保** 僕も同じです。たまにこちらから演奏者にアドバイスする時もあります。客観的に聴いていて、ちょっとペダルが多すぎるとか。今回のファイナルでも、これは伝えた方が良くないと感じたので感想を伝えたら、実際本人もそう思っていて意見が合致したので、その後修正していました。それもまたコミュニケーションだと思いません。

**編集部** 伝え方も難しいですね。

**大久保** 気分を損ねるのは一番やりたくないことです。こちらは気分を上げるために何をしてあげられるかということが一番大事ですから。ただ、相手のプラスになると思うことは聞いたり言ったりします。

**花岡** 室内楽でもコンチェルトでも、「ピアノの音、届いていましたか？」とか聞かれることが多いのは事実ですね。そういう意味では調律師とピアノストの信頼関係って大きいと思います。いろんな相談をされたり、我々が本当は言う立場ではないような音楽的な表現について聞かれることもあります。

**編集部** その方たちが入賞されたらうれしかったでしょうね。

**花岡** やはり、彼らが本当にこれでいいのかと困った時に、最良のアドバイスができれば信頼関係につながるし、相談してよかったと言ってもらえると、お役に立てたことを本当にうれしく思います。

**大久保** ある意味、一緒に闘っているようなところがあります。戦友といいますか、一緒のところを目指して頑張っている仲間

ですね、ピアノストも。

**編集部** 終わってからの感謝の言葉とかはどうでしたか？

**花岡** それはもちろんありますし、それぞれにこのコンクールで表現したい重要なポイントがあつて、それができたからすごくよかったと言われました。ピアノシモで聴かせたいというコンテストがいらして、ステージを重ねてそれが表現できたからそ次のステージに進めてすごうれい、というような言葉もいただきました。「ここだけはやりたかった、表現したかった」ということが叶えられたら、ほんとに皆さん、喜びますよね！

**大嶽** 浜松国際ピアノコンクールの調律をヤマハもカワイも協会員の方が担当しました。プロの調律師としてピアノにかける思い・責任感がひしひしと伝わってきました。この様な気持ちで各コンクールに臨めば、コンテストも幸せですね。今後の御活躍を期待申し上げます。長時間にわたってありがとうございました。

# 浜コンホストファミリー

大石とし子

(日本ピアノ調律師協会／静岡支部)



中国のワンさん達と夕食

## 浜

松国際ピアノコンクールは今回で第10回、30年が経過します。期間中は仕事をoffにしコンクール三昧。第一回から全てのコンテスタントの演奏を聴いてきました。今までチャイコフスキー・仙台・ソウル他、コンクールを聴きに行きましたが、世界中の若手が浜松に集まって、居ながらにして聴ける3年に一度のお楽しみをエンジョイしない訳ないですね。私は同時にホストファミリーとしても参加していて、今までお母様も含めて19人の方が滞在しました。今回はアカデミーでステイしたワンさんが受けにきました。「落ちる(予選敗退)とホテル滞在がホームステイになるので、今回は家にきてはダメよ!」と言っていたのですが、再び我が家滞在中、お母様と二人でしたので買い物に御一緒し、餃子を山盛り作りしました。お母様とは漢字で筆談したのですが、結構それで意志疎通できました。中国と日本は同じ文化圏

と改めて実感した次第。

ワンさん達が帰ってからは、クロアチアの貴公子、アリオシヤ・ユリニツチ君が来ました。でも浅草を観光したいとのこと。翌日東京へ。2019年2月浜松アクトホールでのチェコ・国立ブルノフィルのチケットを買ってあったのですが、なんとそのソリストだったことに気付き、チラシとチケットを見せると「ワオー聴きに来るんだね」と熱烈にハグされました。彼はコートとスーツケースの鍵を我が家に忘れ、コンサート終演後楽屋にお届け。ハプニング付きでした。演奏会はコンクール時ファイナルに持ってきていたチャイコフスキーのピアノコンチェルト1番。チェコのオケで聴けて良かったです。こんな風にコンクール以外での再会というのもホストファミリーの醍醐味かもしれません。

その前の第9回はロシアの3人組でした。ホストファミリー登録されている家庭



ロシアからの3人

は掲示板に張り出されていて、コンテスタント自身が選び、事務局がマッチングしてくれます。リザが我が家を選んだのは何度かコンサートにお招きしているオニシエンコの紹介でした。その時は友人の『ショパン』誌のライターのF氏も取材にいらしていて、グラランドピアノが置いてある防音室でリザが「モスクワ郊外の夜は更けて」を弾き始め、やがてロシア民謡を私達は日本語で、彼らはロシア語で大合唱。とても楽しい一時でした。でもその回は、こんなこと初めてという非常識なこともありまし

た。ロシア人の一人がメーカーの方がホテルを用意したからと友人経由でメールをもらい、夜中に急遽宿泊先がホテルへ変更になったのです。友人宅では「さあ食事にしましよう」とワインの栓を抜いたところに、タクシーを回してきて拉致されてしまったそうです。市民ボランティアが多く関わっているのも浜コンの特徴。いくらスポンサーになっているメーカーでも、ルールに則って事を進めて欲しいものです。

## 浜

コンで優勝したアレクセイ・ゴルラッチ君やドミトリー・オニシエンコ、イリーナ・ナウモフスカさんは今も親しく交流しています。ゴルラッチ君が滞在了したのはアカデミーの折で、ママと一緒にでした。朝食に私はダシ巻き卵を作っていたのですが、私が砂糖を手にしたら、ママ



ゴルラッチ君と

が「とし子、塩はこちら」と塩を手渡そうとする。「いや、必要なのは砂糖」と言う目を丸くしていた。お互いに卵焼きを作り、私は甘いダシ巻き、ママはバターと塩味のスクランブルエッグで食べ比べ。アレクセイは甘い卵焼きが気に入った様で、今も時々作るそうだ。彼が『ショパン』誌のインタビューで「日本食は何が好き？」の質問に「とし子の天婦羅！」と言った記事を読んだ時は「ヤッター」と思ったものでした。

彼の人間性を表す一面をひとつ。コンクール中、パパも仕事で日本に来たからと寄って下さいました。夫は何か美味しい物でもご馳走してやれと軍資金を持たせてくれたのですが、4人で食事した後「ここは私の招待ね」と言ったら、3人で何やらゴシヨゴシヨとウクライナ語会話。「とし子は民主主義が好きか？」と唐突に聞く。「もちろん民主主義が一番大切」と私。するとアレクセイが「とし子が私達を招待するのがいいと思うか？」と言つので「はい」と私。アレクセイが「私達がとし子を招待するのがいいと思うか？」と言ひ「はい

い！」とアレクセイ達。パパが「とし子、あなたは民主主義が好きだと言ったね。多数決で3対1だから、とし子は私達に従わなくてはいけないよ」と言うわけ。ウィットに富んだ計らいで御馳走していただく羽目となった。アレクセイが温かで素敵な家族の中で育ったことが垣間見え、彼の音楽の温かさはここから来ているのだと思います。毎年クリスマスには音楽付きのeカードが届き、家族での交流が続いています。

イリーナさんも来日の折、東京で1日だけ自由な時間があるからと、頂いた花束を持って浜松まで遊びに来てくれました。

オニシエンコはチャイコフスキーコンクールに入賞した翌年2003年に浜コンを受けに来たの縁。我が家でミニコンサートを開きました。プロコフィエフ7番は凄味のある演奏でした。当時、いさだホール（磐田市南部のホール）を活性化させようと、「いさだ友の会」の運営委員もしていた関係から、友の会の力をお借りして2年毎にいさだホールのコンサートにお招きしています。今ではロシアで「音の魔法」

というフェスティバルコンクールの審査委員長もしているようで、活躍しているのが何よりも嬉しいです。世界は狭くなったもので、我が家を訪れてくれた方々の活躍をSNSなどで見るのが楽しみです。

我が家のホームステイは「特別なおもてなし」はしません。互いのしたいこととスケジュールを突き合わせて、朝食と夕食は準備するが後は自由行動でということにしています。幸いバス停が家の前なので、バスのパスカードと鍵をお貸しし、コンクールがオフの時は浜松城や中田島砂丘の観光にお連れします。今回、私は練習室のサインウェイ調律に朝7時半から9時まで入ったので、5時に起きて朝食を用意。調律している間に食べてもらい、9時半に帰宅。私は再び10時に始まるコンクールを聴きにアクトに戻ります。一緒に出るなら乗せて行くし、自由な時間に出なければバスで。帰りは終演時にホールに来れば一緒に帰るけど、早く帰りたければバスで、というわけです。夕食の支度は昼休みに戻ります。特別なおもてなしはしませんが、音楽という共通部分があるのでコミュニティ

ケーションは取れていました。

有名コンクールで入賞しても、音楽で食べて行くのは大変なことだと、どの方からも聞きます。将来に不安を抱きながらも真剣に音楽と向き合う彼らの姿に、考えさせられることが多いホストファミリーです。

韓国、中国、ラトビア、オーストラリア、ロシア、ウクライナ、マケドニア、セルビア、クロアチアなど様々な国の方を受け入れました。リタイアしたら、彼らの所を訪ねてみたいと思います。出来ればその土地での彼らのコンサートを聴きながら。



サインの入ったピアノ

# 歴史的ピアノ探訪

その1

伊東基貴

(日本ピアノ調律師協会／中部支部)

## 大阪大学会館講堂の1920年製ベーゼンドルファー



ステージのベーゼンドルファー

ピアノが18世紀初頭にイタリアで誕生して300年以上が経ちます。日本国内では、明治政府が西洋文化に学ぶべく、アメリカから1880年に音楽教師がピアノを携えて招聘されます。それから今日まで、音楽文化の成熟は広く増しています。国内各地にはそれをものがたるかのように、多くはないですが歴史の興味を持ったピアノが点在し、今なお使用され活躍しているようです。それらのピアノに、会いに行ってみようかと思えます。

大阪大学豊中キャンパスに、国の登録有形文化財建造物に指定される大阪大学会館という建物があります。その講堂に備品として設置されるピアノは、1920年製ベーゼンドルファー。修復がなされていますが、今なお現役として深いヴィンテージ感の味わいを醸し出しています。





大阪大学会館の外観

毎月一度このピアノを使って、ワンコイン市民コンサート(www.artsocca.com)という演奏会が開催されています。すでに7年以上、やがて100回目を迎えるそのコンサートを企画運営されている、理学博士で大阪大学名誉教授の萩原哲さんによると、このピアノで演奏される音楽には、重要な意義を見いだすことができると考えていらっしやるようです。

ご自身もピアノを弾き、音楽への深い造詣を持たれていて、その眼差しからは、ぶれるところのない、クラシック音楽の本質を見極めようとしておられるのだらうと思います。

現在の Bösendorfer (ベーゼンドルファー) 製品ラインナップには含まれない、2550 (実寸は252cm) という品番モ

デルで、鍵盤数は92鍵(最低音fから)。当時メーカーはこの機種に Liszt Fügeli (リスト・フリーユゲル) と名付けていました。今のピアノからは薄れてしまった、柔軟に反応するセンシティブさがあり、表現の妙を引き出してくれると、国内外の著名ピアニストがワンコイン市民コンサートに出演しています。このピアノに取り組みピアニストたちのひたむきな情熱が、客席に心地よい緊張感として広がり、大学キャンパスの小高い緑に囲まれた、レトロ調ホールで優れた演奏にひたるひとときは、極めて上質で濃密な時間の共有といえるでしょう。そんな場所に相応しいピアノではないかと思えます。



コンサート休憩時間に解説する萩原先生

最近では、このホールでの録音による、ピアニスト松尾久美さんが弾くCD「Kumi Matsuo plays Berg Debussy Schumann Liszt」がワンコイン市民コンサートレベルの第一弾として発売されました。よりクラシック音楽の、クロニクルの実践またはアーカイブの場という趣が感じられます。

# 音

## 進藤 尚美

(日本ピアノ調律師協会会員／関東支部)



私はピアノ調律師になって20年くらいになります。メーカーの調律師として数年仕事を経験し、その後は現在のピアノ修理工房に所属しています。

普段は一般家庭や学校、ホール  
のピアノを仕事としていますが、合  
間にお客様から預かっ  
たピアノの修理や調整  
をコツコツと進めてい  
きます。ピアノは30〜40  
年経つとオーバーホー  
ルしますが、このオー  
バーホールという作業  
を何台か経験するうち  
に修理前の音を聞いて  
修理完了後の音を想像  
できる様になりました。  
ピアノが設置されて  
いる空間での音を覚え  
ておき、工房へピアノを

引き取ってきて現状を克明に記録しそれ  
から解体していきます。外装をはずしてい  
く工程や古い塗装の剥離にも、音に直接的  
あるいは間接的に関係してくることもあ  
るので慎重に進めていきます。フレームを  
外す際のネジの固さ、響板の古いニスを剥  
離していきながらも仕上がる理想の音を  
イメージしながら使用する部品や材料を  
選択していきます。ようやく仕上がり最終  
的にお客様の元に直接納品して、弾いてい  
ただいた時の喜びはそれまでの苦労が吹  
き飛ばす程です。

工房では現代ピアノ以外にも1800  
年代の歴史あるピアノの修復もしていま  
す。私が工房に弟子入りしたばかりの頃、  
師匠について東京都国立市滝乃川学園にあ  
る「ドリーング」というアップライトピ  
アノの修復後のメンテナンスに行った際、そ  
の外装に驚かされました。塗装は現代のピ  
アノの様な艶はなく、だからといってよく

見る艶消しとも違います。師匠に聞くと当時のヨーロッパで使われていたラックの黒を刷毛塗りとタンポで塗っていたそうです。前パネルや妻土台（キヤスターがつく台）には筋彫りに金粉が入っていて、一番の特徴はガラスに焼き付けた天使の写真が正面にあったことです。外装を外していくとハンマーの上にダンパーが付いている「オーバードアンパー」という現代ピアノには見られないもので、音はピタツと止まらない仕組みです。外装の塗装も、平行弦（現代のピアノはバス弦と交差）であることもその時初めて見るものでした。やはり実際の「もの」を見ることは何よりも大変勉強になります。

日本で最初の知的障害者施設であるこの学園は、創設者石井亮一氏により始まりました。創設についての大変なご苦労が偲ばれます。このピアノは石井筆子氏のピアノです。ピアノ調律師協会で鑑定・調査後に修復し、その後は学園のチャペルで使用されています。今ではコンサートも行われ多くの方々はその音を聴いていただいています。一度美智子皇后（現上皇后）がドー

リングピアノをお弾きになる際、師匠の調律に立会い演奏を聴くことができました。幸運にもお声を掛けていただき、調律師協会で修復を引き受けたことを伝え、弟子で修行中だと申し上げますと「頑張ってください」とおっしゃっていただき励みになりました。今でも大切な思い出として心にしまっておりま。

今工房で修理中のピアノも「母が買ってくれたピアノを子供達が習っているから」と50年程経ったピアノです。いわば3世代にわたって鳴っているピアノです。やはりピアノはいつの時代でも高価なものであり、大切にされてお使用し続けているものではないかと感じます。よい音で永く使ってもらえれば、よい音で「良い音」になります。私は日々「良い音」になるように修理修復に取り組んでいます。が「良い音」「音」とは何だろうか？と考えるようにしています。自分の技術力だけでなく、依頼されたお客様の希望だけが全てでもありません。相手がいてくださって初めて成り立

つ関係でもありませんから、双方の思いをキヤッチすることが更に大切になります。そして無言で修理を待つピアノと対話しながら修理後の音を想像するようにしてきました。「音」は言葉で表せないことも多い様に多種多様な感性が生まれます。作業にはゴール地点が見えないこともあり、依頼者のもとよりピアノ本体にも喜んでもらえるように日々真摯にコツコツと向き合うことを大切にしています。



ドーリング 天使のピアノ

# コンサートの調律

大久保武

(日本ピアノ調律師協会会員／九州支部)



ピアノ調律師を目指して浜松近郊の弁天島にあった調律養成所に通っている時に、初めて「コンサートチューナー」という言葉を耳にしたように思う。小学生の頃に自宅に來られていた調律師とどう違うのか？あの頃は想像もできなかった。

東京で勤務し始めた頃から、時々コンサートの調律をやるようになったが、先輩達の仕事を何度か見学したくらいで、何をどうすれば良いのか見当もつかない状態だった。

30年前（1989～91）に勤務会社の研修制度で、2年間欧州に滞在し、三ヶ所のディーラーにお世話になった。最初にお世話になったドイツ北西部のディーラーは収容450名のホールを有し、週3～4回のコンサートを催していて、約1年間はそのホールのコンサート調律を任せられた。演奏者は世界的なピアニストや声楽家、器楽奏者も多く、とても良い経験になった

が、演奏者のピアノに対する要求としては、ほとんど記憶になく、その頃のヨーロッパのピアニストは調律師に依存することはあまりないように感じた。記憶に強く残っているのは、リハーサル後の再調整の時に椅子の高さを変えないでほしいと言われたことである。その重要性はその後の調律の仕事に大変参考になっている。

その後の1年はコンクール等の仕事があったが、コンサートの調律はあまりなかった。国際コンクールは色んな参加者が激しく弾くので、イーブンなコンディションを保つのが大事だが、狂い難い調律という面では大変に勉強になった。また色々な作曲家の曲をハイレヴェルな演奏で聴けて、大変耳が肥えた様に思う。そして同じ楽曲でも、違う解釈とテクニックでかなり違った曲に感じた。

帰国後コンサートピアノの製造部門に約3年間勤務したが、その時の経験が今の私の技術の礎となっている。ハンマー付けからアクション合わせ、鍵盤荷重調整、整調、整音、側付け等全ての工程がレギュラーピアノと違うレヴェルで作業していき、か

けられる時間も違う。その時担当した楽器を今も保守点検、調律で触ることがあるが、非常に感慨深いものがある。

コンサートの調律の仕事は、一定期間良い状態を保つ必要がある保守点検や一般家庭のアフターサービスと違い、その公演中最高の状態になるように努めなければならない。ほとんどのピアニストは弾き慣れた自分の楽器ではなく、その会場にあるピアノで演奏しなくてはならないが、調律師はいかにその違和感をなくす方向に調整できるかが重要だと思う。

本来、楽器は演奏者がチューニングするものだが、ピアノはその弦の数、また音を合わせる技術の難しさ、アクションメカニクスの調整の複雑さが故に調律師が必要になる。稀にご自分で調律やタッチの調整をなさる方がいらっしゃる。その技術の習得にかかる時間は練習に回した方が良く、思っている方がほとんどでしょう。

多くのホールのコンサートピアノは温湿度の管理された専用のピアノ庫に保管されているが、どんなに素晴らしい環境に置い

てあっても、ステージに上げれば空調や照明で変化がある。特に冬場冷え切ったピアノを持ち込んだ場合は、多くの場合中音部のピッチが上がっていて、本番に近い環境になるまでは触らない方が賢明だと思う。



本番当日は調律のアップ時間を予め聞いておきそれまでに終わらせるが、少なくとも鍵盤の摩擦の状態とベッディングスクリュー（語句説参照）はチェックしたい。時

間が許せば整調、整音も診たいが、メンテナンスを実施している楽器は、なるべく調律だけで済ませたい。

ピアノの位置はホールによつては舞台担当者が標準的な置き場所や、キャスターの向きを決めているが、ほとんど場合はリハーサル時に演奏者の意見を聞いて修正する。音源の位置とキャスターの接触面、向きで驚くほど音が変わるが、演奏者の意思抜きではやれない作業だと思う。

演奏者が到着して、最初に楽器を触る時が一番緊張する。以前に満足していただいた仕事をしていたとしても、今回のピアノを気に入って貰えるかどうかは別である。一通り触っていただいて特になることがなければ、とりあえずリハーサルを始めたい。こちらは客席に移動しながら、音を聴いて楽器と演奏者の状態を探る。

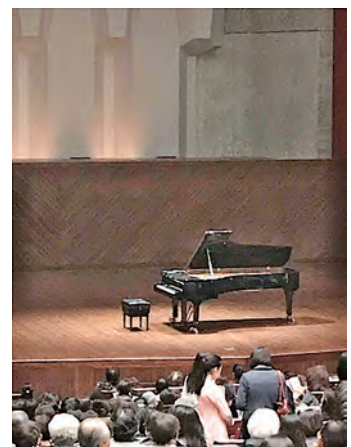
演奏者の多くは自分の出した音がホールで響き、帰ってくることでタッチをコントロールしていると思われるが、音響反射板やピアノの位置、温度湿度、また聴衆の数や服装でその音は大きく変わってくるので、本番中どの様な環境でピアノの状態は

どうなっていくのか想像して位置決めや調整をしなくてはならない。

リハーサル終了後本番に向けて再調整を行うが、演奏者の要求は様々で、お任せの場合もあるし、細かく指示をされる方もいらつしやる。時間内でできる限りの対応をするという意思表示はとても大切だと思う。時には時間の関係上、開場時間と被ることもあるが、その是非も演奏者に確認すべきである。

そして本番ではステージに向けて見送るが、どんなベテランの演奏者でも本番前は緊張する。適度な緊張感を保ちながらリラックスした演奏ができるように、安心感を持つてもらえるような存在でありたい。時には念力を送り少しでも演奏の手助けをしたいと本気で思ったりする。

さてコンサートが始まったら願うことはただ一つ、断線等何のトラブルもなく無事に終わってほしい。そして演奏そのものより、ピアノの音、ペダルの雑音、椅子の軋み音、観衆の発する音、耳は常にその音を追いかける。これは自分が調律していない演奏会も同じで、一種の職業病なのだろう。



う。コンサートの仕事をする前はこんなことはなかったと思うが、純粹に音楽を楽しむめなくなっている気がする。

コンサートが終わり、演奏者から「ありがとう」と感謝の言葉をいただいたら全ての苦労は報われるが、その演奏の為に莫大な時間をかけて練習された演奏者には、尊敬の念を抱かずにはいられない。

(語句説ベディングスクリー……メーカーによってスベリ金具ともいう。鍵盤を支える土台、箆は板の組み合わせにより構成される。グランドピアノ特有のソフトペダル効果は鍵盤をずらしてハンマーと弦の当たりを変えることにある。棚板の上に箆鍵盤が乗せられ、それをずらす仕組み。その動きに負荷を掛けないため、箆構造は棚板から中央を浮かしている。浮かしたままだと鍵盤打弦したときに力のロスが発生する。柔らかく安定しない所で打弦しても力が伝わらない様なもので、それを補う調整ネジのことをいう。)



# 自然と音と魂

## 十二所 秀正

(日本ピアノ調律師協会会員／関東支部)



クラヴィコードに触れ始め、既に半世紀も過ぎました。日本の奏者(故)がヨーロッパの奏者六大著名人に奏法を習い帰国。その練磨の演奏に接し、私は魂を奪われた。

ピアノと同じ鍵盤の配列を有していても、グリッサンドやベープンク(音を揺らす)等、表情豊かに表現、日本古来の曲をも奏したのは驚異だった。そのことが私の鍵盤楽器への大きな転換を迎えた。さて、私が鍵盤楽器の修理に入った最初はまだ戦後の狐狼の激しい時期で、先輩職人たちは軍靴に戦闘帽での帰還だった。戦争中少年だった私だが、密かにピアノを弾いていて、戦後数年後には本格的に修理を始めた。当時、動力の電気使用に制限が在り、殆んど手作業で木工から全塗装だった。その工房では、行き場のない芸術家がストーブを囲む場となり、幅広い芸術論を聞くことができた。西洋東洋を問わない高尚な内容を語って、自国の文化意識の魂を持って他国の文化を覗かないと猿真似にしなければならない等の言葉は頭に焼きついた。能楽を始め(どう)の着く書・茶・花に触れる機会は多くなり、そのことが嵩じて日本の音拾い歩き

を始めた。それに止まらず、遠いシルクロードの天山南道等へ日本文化の原点を探す旅へと心が走った。丁度その時、順天堂大学解剖学部形質人類学研究所からインド五年調査計画に民族音楽を担当しないかとの依頼が来た。それが昭和45年(1970年)半世紀も前のこと、天からの強い導きを感じた。調査の目的は純粹な部族の骨格形態の調査で、私は民族音楽とその生活を担当することとなった。目的地はデカン高原の北端から南部の端迄でカルカッタ市からは最初の Dagara 部落迄三週間を要した。その道中も休みなく私の調査は続いた。天に祈る歌や祝い歌など多くの成果を得ることができた。部落での貴重な取材は成功を見た。

日暮時に吹いたオカリナの音は天空に拡がり私自身驚いた。この音に誘われてか部落民がそれぞれの楽器を持って満天の星の下で深夜に及ぶ演奏となった。

点々と数キロも離れた部落の数箇所でも貴重な調査を続けた。デカン高原の音の神秘的な出会いは初めてだ。彼らの生活の中は、楽器以外農耕具ぐらいた。片面太鼓

(Tinkla) 両面太鼓 (Dklar) カスタネット (Chara) などで笛も自家製であった。

大都市カルカッタでのインド代表音楽ヒンデスタームミュージックの音に関して触れておきたい。世界的名手シタール奏者ラビシャンカールの師であるアハメドカハン氏とその弟子達の演奏に触れる。氏は「レコード等再生音の音は音楽ではない」を通説としているが、私の調査は学術研究が主であったので協力してくださった。警察署長の自宅ロビーを提供され、そこで音響の状況や楽器の配置、それらに一時間以上要した。更に奏者と聴く側との心の一致を計る氏は、随分間を置いたがいつの間にか曲に入っていた。空間全体が良い楽音を響かせた。始めも終曲にも拍手はなく合掌して静かな余韻だけが残った。

数年にわたる調査はネパール・ブータン・タイ等を経て台湾・中国・韓国・復帰前の沖縄へと続いた。ネパールのヒマラヤ山脈麓の村の祭、神典を担ぐその様は音も雰囲気も日本のそれとまったく同じだったことに驚愕。私も拍子木で先頭を切り、また次の日は頼まれ次の村の祭に参加した。

これらの旅で得た音は全て私の楽器の仕事に重要な位置を占めている。

これから日本の楽器産業に関わる若い者には是非勧めたいことがある。まずは日本文化の歴史を覗いてほしい。世阿弥の風姿花伝書等勧めたい。また、室町前期の能・謡曲の幽玄にふれて日本の音と言葉の魂を感じてほしい。伝統的な一弦琴に触れることや能舞台に興味を持ち、日本古来の文化の魂に接し理解者になることが必要と感じる。現在の邦楽師にドビュッシーやショパン等の曲を和楽器で奏でる場が増えてきた事実がある。このことに対し、欧米人達の絶賛もある。

柏崎にドナルドキーン記念館が出来、昨年記念公演をした。その際、私がリードオルガンを設置し関東のコーラス団が合唱。石川啄木の歌とキーン氏(2019年2月24日没)の公演で長時間ではあったが有意義な日となった。こんな出来事が仕事上増え続けることを願いながら85歳の話閉じるとしよう。



バンケット

# 国際ピアノ製造技師調律師協会 (IAPBT) 世界大会が、日本国内で 開催されました

伊東 基貴

(日本ピアノ調律師協会会員／中部支部)

第21回 IAPBT (国際ピアノ製造技師調律師協会) 浜松大会が、5月25、26日に浜松市アクトシティ浜松で開催され、予想を上回る多数の参加者852 (国内738 海外114) 名で賑わいました。隔年に開かれ日本では4回目、前回から20年ぶりになります。同時に、一般社団法人日本ピアノ調律師協会 (JPTA) 通常総会も同会場で開催。

今回の大会合言葉は「Piano Piano Piano」、シンポジウムでのテーマは「ピアノがもたらす豊かで幸せな人生」。25日午後にはオープニングセレモニーがあり、その後スペシャルクラシックコンサートでは、昨年の浜松国際ピアノコンクール優勝者、ジャン・チャクムルによるピアノリサイタル。更に場所をクラウンパレス浜松ホテルに移しての、ウエルカムパーティでは参加者の懇親が深まるひと時が持たれました。翌26日には、午前中 IAPBT 理事会会、午後 IAPBT 総会の後に、アメリカ人デュオブルース・ヒューバナー (尺八) とジョナサン・カットツ (ピアノ) のブライトワンズダークワンズ (BODO) によるス

ペシャルジャズコンサート。その後はオー  
クラクトシティホテルでのバンケット  
(晩餐会) で大団円を迎えた2日間でした。

その間に、4つの会場で12のセミナー  
と、日本ピアノ調律師協会の各支部ブー  
スや参加企業ブースでの展示、女性フォー  
ムなどの同時進行イベントが盛りだく  
さん。すべてを周りきるのはとても不可  
能かと思える中、この世界大会の意義  
と見どころを振り返ってみたいと思  
います。

世界のピアノ技術者の集い IAPBT  
は、1979年7月にアメリカのミネ  
アポリスで日米のピアノ技術者協  
会の代表が中心となって会議が催  
され、念願の国際組織の設立が決  
まり直ちに発足しました。以来2  
年毎に世界各地で各国の代表によ  
る総会を開催し、討議、シンポジ  
ウムを通じて技術情報の交換を促  
進し、友好を深め、音楽文化興隆  
への貢献を目的とする活動を続  
けてきました。



会場のアクトシティ浜松



クラシックコンサート



ジャン・チャクムルさん



IAPBT総会

IAPBTには世界各国のピアノ調律師・製造技師の団体が加盟しており、団体のない国においては個人会員としての参加があり、現在の加盟国は個人会員も含めると31カ国に及ぶ組織になっています。



女性フォーラム

す。これまで日本では1983年東京、1989年京都、1999年浜松と3回の開催実績があり、今回の第21回浜松大会は20年ぶり4回目の開催となります。

ピアノがイタリアで誕生して300年以上が経ちます。その後、ヨーロッパでの産業革命とアメリカでのテクノロジーの進歩や音楽文化の成熟とが、ピアノの進化に大きく関わり、ピアノの地位が社会的にも音楽文化の中心に位置づけられてきました。その製造と調律技術は、高度な専門化で洗練され今日があり、それを担う技術者たちが広く集う場が、IAPBTということになります。

世界大会の会場アクトシティ浜松は、浜松駅に隣接したコンGRESセンターと、大中ホールなどを併設する文化施設です。あの浜松国際ピアノコンクールが3年に一度開催され、昨年の11月に第10回が行われました。そのアクトシティ浜松の、コンGRESセンターの1〜5階全フロアと中ホールが会場として使われました。

2日間つねにそれぞれの会場で、同時進行的に催し物があり、特に4階と5階にそ



セミナー

それぞれ2つずつ4つのセミナー会場では、12のプログラムが順次開かれていきました。その内容は、ヤマハ、カワイ、ベヒシュタイン、ファツィオリ、ベーゼンドルファー、レンナー・ジャパン、ボルドウック、タッチウエイト調整の中村祐司氏の他、リラピアノ修復、栗形亜樹子氏のチェンバロレクチャーコンサート、古典調律の岡本芳雄氏の3つの特別企画セミナーです。

世界的屈指のピアノ各メーカー会場では、最新フラッグシップ機を頂点とした新しい試みと、またはこれまでの伝統で培ってきたメーカーのアイデンティティーが語られ、特別企画セミナーでは、歴史に埋没してしまった特殊な構造を持つピアノの修復と、平均律から離れた調律法のデリケートな響きに耳を澄ましてみる、そんな個々のセミナーが展開されました。

今回のキャッチフレーズ「Piano Piano Piano」には、ピアノの技術者だけでなく、ピアノを弾く人、聴く人、運ぶ人などピアノに関係するすべての人たちに向けられた合言葉です。両日のスペシャルコン

サートには、一般のお客様も多くお越しいただき、洗練された演奏のひとつを共有することができました。

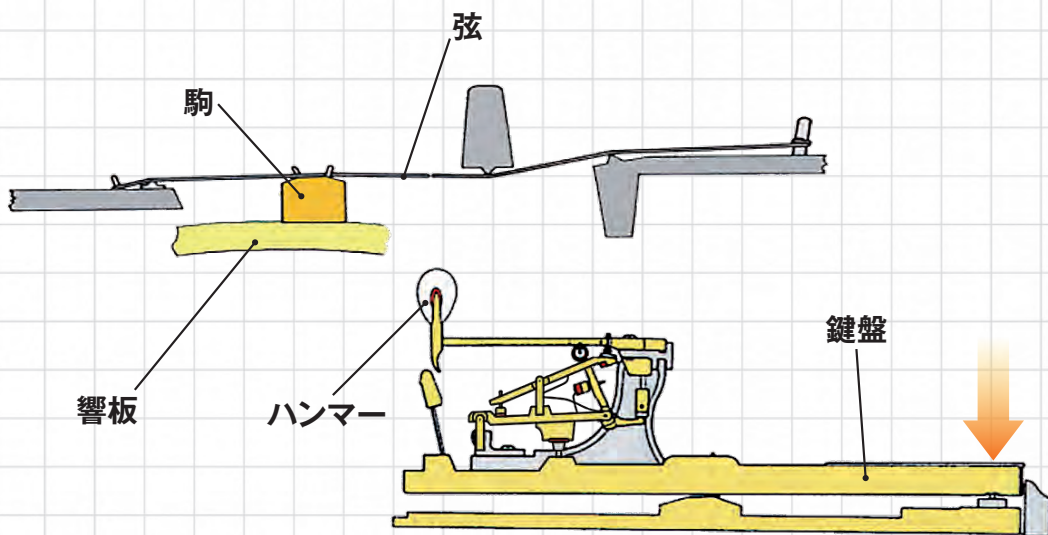
そして最後に、今回の会場プログラムのひとつとして「女性フォーラム」が開かれたことに注目したいと思います。ジェンダーを世界的に論じられて、もういぶんになるはずなのに、その現状はなかなか理解と定着がなされていないようです。我々の調律師の領域においても女性の進出は著しく、今後も広がりはより増すことでしょう。いろいろな議論がなされたことで、希望を進展とし、本当に「ピアノがもたらす豊かで幸せな人生」が繁栄できる展開を目指したいと感じました。今回のIAPBT世界大会は、2021年にポーランドのワルシャワで開催予定です。



ジャズコンサート (ブライトワズダークワズ)



展示会



## ピアノのはなし その1

# 発音のメカニズム

①下げられた鍵盤は、鍵盤中央部支点を境に押し上げられ、アクションを介してハンマーは弦へと突き進み弦を打つ。打たれた弦は振動し、②駒に伝わり響板を震わし空気振動に変え、私達の耳へと届く。これがピアノ発音のメカニズムである。

押し下げられた鍵盤は力が漏れる事無く「アクションに伝わり」「ハンマーは自重と伝えられた力で弦を打ち」「弦は妨げられることなく振動し」「駒、響板へと伝えられる」ピアノの良し悪しは、これらが効率よくされているか否かによって決まってくる。特に②の影響力は大きい。その為良い木材を求めメーカーは奔走している。ピアノの価格はこれらによって決められると言っても過言ではない。

ピアノ本体や鍵盤アクションのほとんどは木材で出来ている。環境に於ける影響はすこぶる大である。木材は湿度が高ければ膨らむし、過乾燥が続けば縮み割れる事

もある。鍵盤が膨らめば支点に当たる中央部は固くなり、弾く部分も動き難くなる。アクション可動部は真鍮ピンを中心に円運動をしている。金属と木材（一部樹脂含）だけでは雑音も懸念される為、クロス布を巻き可動を円滑にしている。これと湿度の影響を直接受け易い。言うなれば非常にデリケートな物である。購入後何年か経ち、鳴りが悪く感じたら、どこか力の漏れが起きているのだ。鍵盤やアクションの動きを検証して見る必要がある。信頼のおける日本ピアノ調律師協会所属の調律師に相談すれば、鳴りは回復するだろう。







# 音の扉 2号 令和元年11月30日発行

編集・発行 一般社団法人 日本ピアノ調律師協会

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-21 楽器会館5階

TEL.03-3255-3897 FAX.03-3255-9246 E-mail. info@jpta.org

誌面の問い合わせは発行元へ

表紙 絵/十二所秀正 題字/三浦幾代

制作・デザイン 株式会社 按可社

## 編集後記

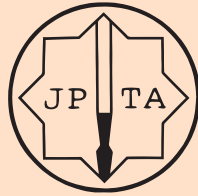
創刊号に続き2号を発行でき、ありがたく思います。創刊号は丁度3年に一度の浜松国際ピアノコンクールの開催年でした。コンクール聴衆に配布できる様、編集に携わりました。何とか三次予選からの配布に間に合い、多くの方に読んでいただけたと存じます。

本年5月、世界のピアノ調律師を集めたIAPBT浜松大会が開催されました。国内外の参加者予定数を大幅に上回る盛況ぶり、近年のピアノ業界低迷をも払拭でき得る大会となりました。世界の大手各社技術セミナーやワークショップ、参加者は技術向上に役立ったことと思います。この培った技術を今度は皆様のピアノに活かして参ります。

さて本号は、浜松国際ピアノコンクールに携わった二社（カワイ・ヤマハ）調律師との座談会を開き、ピアノを準備する立場とコンテスタントコミュニケーション等、舞台裏の様子が見られるようスポットを当てました。何かしら感じ取っていただければ幸いです。

最後に、本誌に対してご意見ご希望が御座いましたら、本誌発行元迄「音の扉」と記入の上お寄せください。

(広報局 大嶽壽宏)



<https://www.jpta.org/>